

野村浩一氏インタビュー (2007年4月21日、於東京大学駒場キャンパス)

野村浩一 (立教大学名誉教授)

村田雄二郎 (東京大学教授)

川尻文彦 (帝塚山学院大学准教授)

大澤肇 (東京大学院生)

吉見崇 (東京大学院生)

村田雄二郎 :

東大の法学部政治学科に進学されたあたりからお話を伺えますか？

野村浩一 :

そうですね。ほんの少し生い立ちから言いますと、**1930年** (昭和**5年**) に生まれたものですから、翌年が**31年**で「満洲事変」の年。小学校の**2年生**の時が盧溝橋 (事件) で、太平洋戦争 (**1941年**) が小学校**6年生**の時に始まりました。まあそういう意味で、昭和初期の戦争の時代にずっと育ってきた、それえゆえにごく平均的な軍国少年だったといえるでしょう。

中学校の**4年生**の時に戦争が終わりました。このあたりから、戦後の私自身の歴史が始まるわけです。翌々年の**47年**に旧制の三高に入りましたが、三高はやはり自由な気風と伝統にみちっていて、この頃から自分の精神史が始まったと思います。この年は旧制の最後の年でした。**3年間**ですから**50年**に卒業して、この年の**4月**に東大に入りました。

私は法学部 (政治学科) に入りましたので、研究者になるということは考えていませんでした。文学部に入った人はわりとそういう気持ちが強いようですけど。私は法学部ということで、最初のごく普通に就職するつもりでいたんです。

年表をふりかえてみると、東大に入った**50年**の**6月**に朝鮮戦争が始まり、**51年**にサンフランシスコ講和、**52年**がメーデー事件の年で、丸山昇さんがその後ずいぶん苦勞されたわけです。僕は別に党などとの関係は無かったけれども、社会主義というのが将来実現するのではないかという感じは強くもっていました。かなりの人がある程度そういう感じをもっていたようにも思います、学生風にですけど。

だから、メーデー事件の時に私も宮城前に突っ込みまして、間一髪逃れたんだけど、丸山さんみたいに率先指揮ということはなかったから（笑）、それ以上のことはなかったけれども。でも、非常に事件としてはショックでしたね。現場もずっと見ましたし。そういう時代だと言えらると思います。

東大 3 年間で、53 年の 3 月に卒業したんですが、大学の 3 年ぐらいの時に研究の道に歩めないだろうかと思ったんです。それは圧倒的に丸山真男先生の影響でしたね。個人的に知ってるわけではなかったけれども、丸山さんの非常に有名な「超国家主義の論理と心理」とかを読んだのと、もうひとつはやっぱり徂徠学の研究ですね、「自然と作為」という徳川思想史に対する丸山先生の研究、これは『国家学会雑誌』で読んで、非常にショッキングだったんです。できればこういう勉強をしてみたいと純粋に思ったんです。

だから先生に研究室に残って勉強したいと言ったんですが、もちろんすぐに許可されるわけではない。3 年生の時には先生のゼミに入りましたね。そんなわけで「なんか書いたものをもって来い」と言われたので、私はその時は日本の思想史をやるつもりだったので、学部の学生の卒論的なものということでいえば、江戸時代の石田梅岩の石門心学について書いたんです。一応、50 枚程度出して。「政治思想史なんかなかなか大変だし、将来の就職といったことは全く保障できないけれども、受けるつもりがあるならトライしてみなさい」ということで。

研究室に入りました時も、僕は日本の政治思想史をやるつもりで、完全にその予定だったんです。だから中国のことは全くそのつもりはなかったんだけど、最初に先生と相談してみると、「日本思想史をやる人はたくさんいるし、それに自分の講座の名前は東洋政治思想史だけれど中国のことをやる人がいないので、別に強制するわけでは全くないけれど、君やってみたらどうか」というお話がありました。

それでとにかく少し考えさせてほしいと言いました。

一体中国を勉強するとは何をやるんだろうと思って、取っ掛かりとして、戦後、東洋史の論文がいろいろ出ていましたが、『史学雑誌』の文献目録という薄い本になっているのがあって、45 年以降出た論文や本、戦後まだ 5、6 年なのでそんなに歴大というわけではなかったけれど、これを読んでみれば良いと思って、全部じゃないですけど、片っ端から読みました。

それらを振り返ってみますと、戦後の東洋史研究や現代中国の初期の段階での諸論文、なかにはかなりの影響を与えたものもあったと思いますが、一般に内容がわりと大きなと

ころでいろいろ考えられるという感じがしました。日本史は専攻する人も多いし、テーマが比較的細かくなってるんですね。だから、日本史は小さなテーマをやるような気がして、一方で中国史は大鉦でぱっさり、ぱっさりやる側面があるように感じて。もっとも、これは実は大変一面的な捉え方には違いないのですけれど。それはともかく、中国の方が興味深いという思いに強くおそわれたんです。

この頃、私は特別研究生だったんです。この制度は前期**3**年、後期**2**年という戦争中からあった制度で、私は特別研究生前期だったんです。今でいえば、大学院修士、そして博士あるいは助手といったコースに当たるのでしょうか。

それでどうすればいいかということになるのですが、東洋史や中文、中哲をやっている方とは全くちがうところから出発しているうえに、語学などをはじめ、全く基礎的なところから勉強しなければならない。そして**3**年間で論文を書かなくてははいけなかったんです。

その時、丸山さんからは史料をいろいろ読まなくてはならないけれど、見る目がなかったらほとんど意味がない。したがって、極端に言えば**1**年目は方法論など理論的な勉強をきっちりしなくてはならないと指示されました。無論、中国の古典などをできる限り先ず常識的に身につけると同時に、やはりマックス・ウェバーを読みなさいと言われました。そこで**1**年目は、『儒教と道教』、『経済と社会』などをドイツ語の原書を中心に勉強しました。

しかし、私は文字通り中国について何も知りませんでしたから非常に不安になって、資料などもちゃんとこなせるだろうか。旧制高校だったので漢文はわりとやっていて、漢文は好きだったので、何とかする他はないと。もうひとつは中国語の問題がありました。非常に焦燥感にかられていたことを思い出します。

またその時、私は最初は宋学など中世のものをやりたいと思っていました。徂徠学のような分析ができる、かなりはっきりした観念史的なものをやりたいと思っていました。しかしそれに対して、先生からはやはりこれまで学部でやってきた勉強ということもあるし、「近代をやったほうがいい。むしろそれが必要なんだ」というサゼスションを受けました。しかしそのためには単純に近代からというのはよくないと考え、「近世から近代へ」というかたちで先ず勉強をしようと思い、最初の論文は清朝を扱うことになりました。

結局、自分の研究対象をほぼ「清末から近代へ」とし、政治思想史というかたちで問題を設定してやらなくてはならないと思ました。**2**年目、**3**年目は必死になって勉強し、最初の論文を書きました。このプロジェクトは「学統」を問題とするそうですが、私の研究上

の環境ということであれば、そのあたりから出発したといえると思います。

村田雄二郎：

大学入学の時点で社会主義中国はすでに成立していたわけですが、同時代の革命の動きが中国への関心を強めたとか、東大での勉強の過程で新中国への関心を強めた読書経験や授業などはありましたか？

野村浩一：

学生時代に当時の中国の一般的なことについてある程度は知っていましたが、少なくとも僕にとっては、「New China」、「新中国」というイメージがやはり圧倒的でした。それと、当時多くの人にとってそうであったように、エドガー・スノーの『中国の赤い星』からは大きい影響を受けましたね。このあたりが、振り返ってみて一番興味深い部分です。むしろその背後には中国における革命という問題があるわけですが。

日本の侵略を受けた中国が「旧中国から新中国へ」と大きく変わったというのは、大前提でした。連続性の問題も重要だと思っていましたが、少なくとも当時、中国は生まれ変わったということが言われていた。もしそうだとすると「旧中国から新中国へ」転換した原因は何かということを知りたいというのが、知的、学問的な欲求でした。他方、もう少し別の形で一般人の感覚でいうと、日本は「蒋介石の中国」と戦争し、そして第二次大戦に敗れたわけです。それで45年から2、3年は、日本はいわゆる「焼け跡、闇市」時代で生きるのに精一杯、そして数年が経ってみるとお隣の中国は蒋介石から毛沢東へと変わっていたわけです。庶民感覚からしても、これはどういうわけかという問題はたしかにあったので、私はその後も度々そういう質問をごくふつうの人から受けたことがあります。

村田雄二郎：

清末の公羊学を特研生の時の論文のテーマに選ばれた（「清末公羊学派の形成と康有為学の歴史的意義」(一)(二)(三)、『国家学会雑誌』71巻7号、72巻1、3号、1957、58年）のは、そのことと関係しているのですか？「旧中国から新中国へ」を思想的にたどる場合、清末の公羊学が然りと？

野村浩一：

いや、そういう直接の関係を問題にしたわけではありません。特に公羊学というよりは、やはり清末からの変法運動、変法思想の登場、その後の展開——いわば 19 世紀末から 20 世紀にかけての変容の過程をたどりたかったんです。

村田雄二郎：

大学で、丸山先生以外の授業で中国に関するものを受けた経験や、当時の学生運動へのコミットメントの状況はいかがでしたか？

野村浩一：

学部学生の時代、他学部たとえば文学部の中国関係のものをとったということは全くなかったんです。ただ法学部では仁井田陞先生の「東洋法制史」の講義はありました。

村田雄二郎：

東洋史の先生や学生との接点はなかったんですか？

野村浩一：

学部の時代はそもそも研究対象にする気はなかったので、全く接点はありませんでした。むしろ学部ゼミではマンハイムの『イデオロギー・ウント・ウトピー』をやっていました。

村田雄二郎：

「旧中国から新中国」に変わって、今までの漢学、支那学、東洋史に代わって新しい学問をつくらなければならないという意気込みはありましたか？

野村浩一：

私個人は正直のところ、そういう所までは全く至っていませんでした。むしろ近現代中国そのものを研究する、見きわめたいという気持ちでした。ただ、東洋史や中哲の方々はむしろあったと思います。私の場合は、とにかくそれ以前の問題があって、法学部では周りにそういう環境がないので、とりあえず東洋文化研究所の研究者となるようにということで、その結果、週一の研究会に出席できるようになった経験は貴重でした。この時、所長は仁井田陞さん、研究会では中根千枝さん、周藤吉之さん、その他色々第一線の先生方

が活発にやっていたら良かったです。僕はその時、できるだけそこから吸収するようにつとめました。

それから法学部の先輩では坂野正高さん（都立大から東大）、衛藤藩吉さん（東大）がいらっしゃいました。これは「学統」に関することですね（笑）。坂野さんの上は植田捷雄さんでした。法学部で中国関係を勉強するというので、このお二人、特に坂野さんには大変お世話になりました。ただこのお二人の先輩は「東洋政治外交史」の専攻で、私はかなりはっきりと思想史研究という面がありましたが、坂野さんはいろいろな方を紹介してくださいました。真っ先に紹介してくれたのは、東洋史の市古宙三さん（お茶の水女子大）でした。これがひとつの「学統」ですね。

また、特研生の前期か後期か判然としませんが、東洋史の柳田節子さん（宋代・経済史）、重田徳さん（清代社会経済史）、小山正明さん（清代経済史）、小島晋治さん（中国近代史）（当時は皆さん助手クラス）などとお付き合いさせていただき、いろいろ教えてもらいました。

そしてもうひとつは、京都大学の人文科学研究所とかなり積極的にお付き合いさせていただきました。それも坂野さんやなんかのお勧めで、こちらから押しかけたような感じです。僕は出身が京都なので休みになると、帰るたびに小野川秀美さんや島田虔次さんをお訪ねし、教えを受けました。それは、具体的に何かを質問するというよりは、大変有意義な学問的雑談でした。法学部卒の研究生ということで多少珍しかったせいか、とても親切にさせていただきました。島田さんが、中国文学者の大先生である吉川幸次郎さんにも会いなさいということで御自宅に連れていただいたこともありました。

村田雄二郎：

その時、辛亥革命の研究は人文研で始まっていましたか？もうその頃は、人文研で近代中国に関する共同研究は始まっていましたか？

野村浩一：

それよりずっと前のことです。当時は、桑原武夫さんが主催されるディドロの「百科全書」やフランス革命の共同研究が非常に有名だったと思います。ただし人文研内部の当時の中国研究のことはよく知りません。単純にお二人の先生方とお話しさせていただいたということです。

村田雄二郎：

お話の内容は近代中国だけではなく、中国全体についてですか？

野村浩一：

小野川さんや島田さんとはやはり清末について教えを乞いました。その頃、小野川さんの御本や論文がしっかりと提示されはじめた頃でしたが、私はもう少し歴史を整理したいという気があって、意味づけ、位置づけに関心を集中しました。しかし、逆にいうと、清末の思想について、少しでもそういうふうと考えていかないと、小野川さんの仕事を乗り越えられないわけで、その意味では実証的な面ではむろん頭が上がりませんでした。ただ島田さんの方が、はるかに思想史的というか、理屈っぽかったですね。もちろん島田さんの『中国における近代的思惟の挫折』は大きい意味をもって存在していました。

他方、私はいわば「本籍」が政治学研究室なので、この点はやはり多少きちんと説明しておかねばなりません。政治学関係の人たちとは3年間、さらには後期の2年間ずっと一緒に机を並べていました。日常の勉強会では、福田歆一さん（西洋政治思想史）、篠原一さん（ヨーロッパ政治史）、坂本義和さん（国際政治）、宮田光雄さん（西洋政治思想史）などの先輩、それに田口富久治さん（政治学）、高島通敏さん（政治学）、半澤孝磨さん（西洋政治思想史）などと一緒にいました。ラスキとか、ホッブス、ロック、ルソー、あるいはラスウエル、リースマンなどの話ばかりでした。坂本さんなどから「君はどう思う？」とか聞かれて（笑）。だからこの辺りをベースに、この上に坂野さん、衛藤さんという中国関係畑の方々、また東文研、東洋史、人文研、中哲といった付き合いでしたね。

考えてみますと、私は当時のアカデミズムの世界の中では、かなり特異な形で勉強を始めたように思います。政治学系出身で近現代中国研究ということでは、坂野さん、衛藤さんの「東洋政治外交史」という領域がかなりはっきり開拓、確立されつつありましたけれども、いわば思想史的研究という分野はまだそれ程はっきりとは存在していませんでした。それで広く政治思想史的研究から出発しつつ、対象を近現代中国にしぼり、そのために「東洋史」「中国思想」「中国哲学」の分野に教えを乞いつつ研究を進めたということになると思います。

1956年の3月に特研究生の前期が終わって、後期に進みました。前期が終わった時、丸山先生に論文を読んでいただいたのですが、「私の専門ではないので、竹内好さんにも読んで

もらった方がいいと思い、竹内さんに論文を渡してあるから」とおっしゃって、丸山先生の近所にお住まいだった竹内さんの御自宅に行こうということになりました。二人の大先生と一緒にだったので、大変緊張しましたね。竹内さんからは二言三言、「3年間でやったものとしてはまあまあ、筋が通っている」と言われたような気がします（笑）。それ以外はお二人の興味深い雑談をひたすら聞いていました。知的環境として、お二人の周りにいられたことはとてもよかったです。竹内さんとはその時が初対面だったと思います。今思うと、丸山先生は竹内さんに私と一緒に勉強させてくれという意味で紹介してくださったのだと思います。

後期になって、外的なひろがり急速にできた気がします。しかし丸山さんと竹内さんの影響を受けつつも、「自分なりの研究をどう進めるか」ということは考えざるを得ませんでした。お二人はむろんそれぞれが大変な磁力がありますから、よほどしっかりしていないとバラバラにされてしまいますからね（笑）。

村田雄二郎：

その時、「中国近代思想史研究会」はすでに存在していましたか？

野村浩一：

発足早々だったと思います。その頃、最初に参加しないかと誘われたのは、岩波書店の『思想』の孫文特集のための孫文研究会でした。そこでは、竹内さん、野原四郎さん、安藤彦太郎さん（早稲田大学）、野澤豊さん（教育大）、新島淳良さんらがメンバーでした。そして私は、『思想』1957年6月号に「孫文の民族主義と大陸浪人」という論文を書きました。それで、竹内さんはじめ、みなさんと仕事を通じて知り合うようになりました。

それからもう一つ付け加えておきたいのは、民間の研究所である中国研究所の研究会などにも参加するようにしたことです。戦前の左翼の系列をあきらかに引いている中研に対して、私自身はイデオロギー的には直接の関係はなかったけれど、中研と接触することに何の抵抗もありませんでした。むしろ自分が非常に基礎的な知識がないということを感じていたので、どこからでも吸収したかったのです。中研では幼方直吉さんなどに面識を得ました。幼方さんが倉石武四郎さん（東大）のお宅に連れて下さったことがあります。この頃の中研の所長は平野義太郎さんで、一時所員であった竹内実さんの研究会にも出たことがあります。これらを考えると、振り返ってみて、ずいぶんと広く付き合いがあったよ

うな気がしますね。それはやはり疑いもなく戦後間もない頃の特徴でしょうか。でも、今から思うと、どこへ行っても私は「遊軍」みたいなものだったのかなとも思いますね(笑)。そういう点でいえば、本籍は政治学会だけれども、今は現住所は現代中国学会ないしは中国社会文化学会といったところでしょうか。

なお研究、教育面でもう一つ付け加えておきたいことは、少し先走ることになりますが、私は **1959** 年に立教大学の新設・法学部に東洋政治思想史担当の助教授として就任しました。その当時、法学部にこの講座が置かれている所はなかったと思います。つまり法学部関係では、たぶん中国を直接扱う講座はなかったのです。当時はなお大陸中国との国交は未回復でしたし——伝統ある文学部・東洋史、中哲はともかく——法学部でどのように講義をするかは、大変とまどいました。学生もまたそれほど関心をもってはいませんでした。ただ現在ではどの大学の法学部でも国際関係論、地域研究といった形で主として近現代中国論に関する講義があるようです。こうした点は、戦後日本の中国研究をみるうえで一つの論点ともいえるでしょうか。

村田雄二郎：

先生が中国近現代を対象に研究を始められた頃ですが、例えば **1956** 年に師の丸山先生が陸定一の「百家争鳴・百家斉放」を高く評価する論文を発表されたりしています。また中研は「新中国」に深くコミットしていました。同時代の中国をめぐる研究環境や状況はどのようなものだったのですか？

野村浩一：

私個人の認識から言いますと、当時、中国についてはむしろ「中共」「コミュニスト・チャイナ」という捉え方が先ずは一般的だったわけですがけれども、しかし知的世界ではやはりいわゆる「進歩的知識人」的なアプローチが強く、「スターリン批判」問題等を通じても中国はかなり独自であるという受けとめ方が大きかったと思います。言ってみれば「毛沢東・中国」の独自性あるいは「中国的 Kommunismus」というか。しかし、「百家争鳴・百花斉放」も程なく「反右派闘争」と暗転するわけです。ただ、歴史のかなり決定的な転回点としての「反右派闘争」については当時はその重みを必ずしも充分には捉え切れなかったのではないかと感じます。それは後でものべますが、一つには現実についての圧倒的な情報不足です。そしていま一つには、毛沢東の「人民内部の矛盾」論などが様々の解釈の余

地を提供、提示していたからだと思います。

ところで、私自身については特研究生は**53**年から**58**年までですが、**53**年に第一次五ヵ年計画の開始、**55**年にバンドン会議、**57**年には「鳴放運動」から反右派闘争へ、**58**年に大躍進と、これらが私に影響を与えたのは確かです。しかしじっさいのところは、これらを横目に見ながら、まずは歴史を勉強するというのが自分のスタンスでした。そしてこれらの問題を少なくとも大躍進まではユニークに受けとめていました。この頃、私はおよそ周りにはほとんど中国の人を全く知らなくて、「中国とはどういう国か？」ということもまさに手探りの状況でした。その時代、「中国はたしかに共産中国なのだけれども、やはりソ連とは違う」という思いが一般的に強く、私自身も「中国独自の思想」を突き止めてみたいという気持ちがありましたね。

こうした問題が私にとってかなりはっきり出てきたのは**60**年代です。**64**年に書いた「中国における民主主義の諸問題」（『講座 現代』第**12**巻、「競争的共存と民主主義」、岩波書店、**1964**年）という論文が私の精一杯の解答でした。これらは政治学研究者をベースに行われた研究会の成果でした。そこで私はエドガー・スノーの著作などをも引きながら、中国共産党が人民レベルでそれなりに民主主義を自分のものにしていてと評価しています。これは中国革命をどう捉えるかという問題上にありました。しかし、他方、私はある種の疑念、問題点をもっていました。これはやはり私が近代政治学的な地点から出発していたことが影響していると思います。一言でいうと、毛沢東は「団結—批判—団結」という図式を提示しているのですが、政治社会のあり方ということを考えれば、むしろそれは「批判—団結—批判」でなければならないだろうという問題提起です。これはやはり市民社会的な問題が頭の中に強くあったからだと思います。

村田雄二郎：

先生は『思想』**1962**年**3**月号に「『五四革命』の思想——李大釗について」（後に『中国革命の思想』に所収）、『思想』**1964**年**12**月号に「中国におけるマルクス主義（上）——その形成過程についてのノート」を發表されています。毛沢東に対する関心が**60**年代のこの時期に強まって、中国革命の独自性、そしてその原点として李大釗と毛沢東を扱われたという理解でよろしいでしょうか？

野村浩一：

大体その通りです。でも実はこれは完全に足早に歩きすぎたと思っています。康有為、梁啓超、『新民叢報』と『民報』の論争、孫文というふうには勉強してきて、その後もう少しゆっくり、きっちり研究するつもりでした。それが辛亥革命も十分に勉強できないまま、五四時代の李大釗をとりあげ、次いで中国におけるマルクス主義の流入の問題を初歩的にとりあげることになってしまいました。今にして思うと、それはやはり一にかかって時代の衝迫性によると感じます。60年代に入ると大躍進の失敗から、いわゆる調整期、他方中ソ論争の開始など、とにかく簡単には理解しがたい動きが進行していて、何かその正体を知らなければならない、その動きの秘密を探らなければならないという気持ちがありました。そしていま一つ、国交が未回復で、実際の様子がよくわからない。これは当時を考えるうえでの大変大きい与件です。

なお別の問題なのですけれども、特研生の後期の頃から、当時は『読書新聞』、『図書新聞』、『読書人』など週刊書評紙がよく読まれていて、その頃から書評の依頼をよく受けました。今にして思うと冷や汗ものなのですけれども、郭沫若の『抗日戦回想録』、犬養健の『揚子江は今も流れている』、竹内さんのものなどをやりました。考えてみると、その頃の政治状況、思想状況の中で、中国問題はやはり強い関心を持たれていたといえるでしょう。また、たぶん丸山さんの紹介があったのだと思うのですが、みすず書房の『北一輝著作集』の第二巻『支那革命外史』の「解題」を、非常に不十分ながら書きました。ここで北一輝に触れて、影響を受けましたね。それ以降、北や吉野作造を含めた日中関係の問題を扱う流れが自分の中にできました。

ある時、竹内さんに「近現代中国の流れを自分なりに見通しをつけて、それをふまえた上で日中関係史を勉強したい」と言ったら、「それはよくない。平行してやるべきだ」ということを、かなりはっきり言われた。これは私たちが日本人として近代中国を研究する場合、どういう視点をもつべきかということに深く関係していて、私は重要なアドバイスだったと思っています。

村田雄二郎：

「中国近代思想史研究会」は竹内さんあるいは西順蔵さんが中心でしたか？

野村浩一：

それは竹内さんだったと思います。

ただその問題に関連して、少し話を戻すことにはなりますが、特研生後期の時、ひろがりが増えたということについては、歴史学研究会に所属して委員もやりましたけれども、西順蔵さん（一橋大）との出会いがありました。西さんの読書会には、新島さん、高田淳さん（学習院大）、近藤邦康さん（北大→東大）、伊東昭雄さん（横浜市大）などがいました。ついでに言えば、高田さんの紹介で、東大の中哲の研究室で康有為のことを報告したのですが、そこには宇野哲人という大先生が康有為を識っているということで出席されていて仰天しました（笑）。また、たしか高田さんの紹介で、魯迅研究会の分科会（『天演論』を読む会）にもしばらく出ていました。そして西さんの読書会では、章炳麟や譚嗣同のものを読んで、章の無政府主義や仏教などについても色々勉強させていただきました。西さんの影響も強かったですね。こういうことを言いますのは——これは私の特殊事情かもしれませんが——一般的に研究環境が非常に流動的というか、開放的だったという感じがあったわけですね。

さて、中国近代思想史研究会は、竹内さんや野原さんが書いた岩波新書（『中国革命の思想』）の印税を基に出発したと聞いていますが、本郷の学士会館分館で行い、会報（59年～）を出していました。思うに、竹内さんにはかなりはっきりした意図があって近代思想史の研究をきちんと進めて行きたいということと、もう一つは色んな分野の研究者との交流の場をつくっていききたいという気持ちがあったと思います。だからわりと精勤でした。西さんもよく出ていましたね。山田宗睦さん（日本思想史）なども呼んでいたことを記憶しています。ただこの研究会は丸山松幸さん（東大）が事務的な面も含めて非常にエネルギーを注いでおられ、何人かの中心的メンバーがいました。

それからもう一つ、市古さん、坂野さん、衛藤さん、そして山本達郎さん（東大・東洋史）、石川忠雄さん（慶応大）などのお付き合いが進んだのは、アメリカの中国研究の問題と関係しているんです。この方々が、東洋文庫の近代中国研究委員会を組織され、この委員会がアメリカのフォード財団による資金援助を受けるのですが、それが受け入れ反対運動の対象となるわけです。あるいは逆に、資金受け入れのために委員会が作られたのかも知れませんがよく知りません。私は「学統」から（？）この委員会に誘われまして（笑）、多少の研究活動をしました。

私は比較的最初から、アメリカの中国研究をかなりフォローしていました。例えば **Marius B. Jansen, *The Japanese and Sun Yat-Sen, 1954*** の書評（『史学雑誌』第 66 編第 1 号、1957 年 1 月）や **Levenson, Joseph R., *Confucian China and Its Modern Fate: The***

Problem of Intellectual Continuity, 1958 の書評（『史学雑誌』第 68 編第 1 号、1959 年 1 月）、また周策縦さんの *The May Forth Movement* の書評、フェアバンクさんのお仕事などについて紹介しました。十分に消化していたとはとても言えませんが、今振り返ってみると、ある意味で私はこういう位置にもいたんだなという気がします。というのは、アメリカの研究はやはり広い意味で、社会科学的な研究といえますし、私自身、そういう研究の必要性を感じていて、東洋史の分野では余りそういう紹介がなされていなかったからです。他方、その頃、中国からは范文瀾さんの『中国近代史』上冊が紹介されてきて、一つの歴史像を提示していました。東洋史関係ではかなり強い影響力をもっていて、一つのスタンダードで、私も納得するところが多かったといえます。しかしできるだけ多面的に勉強したいという欲求がありました。

村田雄二郎：

中国近代思想史研究会は、アジア・フォード財団反対運動の先鋒でしたよね？

野村浩一：

そうです。でも私はいま言ったように、東洋文庫の近代中国研究委員会にも入っていたし、反対する立場に全面的に賛成する気にもなりません。今でも憶えています、東大の大教室で開かれたフォード財団問題についての討論大会（アジア・フォード財団資金問題に関する全中国研究者シンポジウム、62 年）がありまして、竹内さんや西さんも参加されていました。そこで、多少勇気がいったのですけれども、「一方的に反対するのはおかしいのではないか」と発言しました。この問題は自立性の問題だと考えていましたね。しかしだからといって、思想史研の中で関係がまずくなるというようなことはありませんでした。その点では、非常にオープンまたリベラルだったと思います。

その後、市古さんや坂野さんはアメリカにいらっしゃって、それぞれ「郷紳革命」論や *China and West, 1858-1861: the origins of the Tsungli Yamen, 1964* を発表されました。ただ、全般的に言えば、この時期の東洋史学は歴研などマルクス主義史学が完全に主流だったといってよいでしょう。西嶋定生さん（東大）なども戦後早い時期から「世界史の基本法則」の貫徹といった考え方に一応のっとして時期区分論争にも積極的に発言し、精力的に研究を進めておられました。近世、近代の分野では田中正俊さん（東大）がいわば社会経済史的に研究を進め、発表されていたと思います。けれど、同時にフェアバンク以降

の戦後アメリカの中国研究を消化しようという動きも一方にあり、石川さんがシュウオーツさんの *Chinese Communism and the Rise of Mao* を翻訳されたりして一定の影響を与えていました。

村田雄二郎：

社会科学的方法を含めた地域研究としての中国研究がアメリカで起り始めた、それと中研など若い世代でアジア・フォード財団資金受入反対運動を起こした人々が分岐した時期が 1960 年ぐらいなのですか？

野村浩一：

私自身の理解では、地域研究 **area studies** としてのアメリカの中国研究という意識は、その時点では特にありませんでした。じっさい、エリア・スタディーズという言葉がかなり意識的に語られるのは、もう少しあとだと思います。むしろその当時はなお冷戦のさなかで、中国に対立するアメリカが莫大な資金を提供して日本の近代中国研究に影響を及ぼそうとしている。中国に対する侵略戦争の歴史をもち、大陸とは国交もなお未回復の日本の研究者としてはそうした資金を受け入れるわけにはいかないという思想的、政治的スタンスが、この運動の基本を形成していたと思います。そうした問題とダブリながら、アメリカの中国研究の方法論的側面、研究の受け入れ、吸収が存在していたのではないのでしょうか。

村田雄二郎：

坂野正高さんらがメアリー・ライト (**Wright, Mary Clabaugh**) さんを東京を案内したのは 60 年代だと思いますが、アメリカの学者と直接接触することはありましたか？

野村浩一：

ありました。

村田雄二郎：

ライシャワー、フェアバンク系統のハーバード学派ですか？

野村浩一：

フェアバンクさん、ジャンセンさん、シュウォーツさんなどとお会いしましたね。ただ多少の面識を得たという程度で、私自身がまだ若造でしたから、色々議論をするなどという段階にはとても至っていませんでした。レヴェンソンさんとは彼が来日した時、会う約束をしながら、都合が悪くなって会えませんでした。少し話しは飛びますが、もう少し後、文革の時期でしたが、エドガー・スノーさんともたしか『朝日ジャーナル』で対談したんですよ（笑）。66、67年頃だと思いますが、スノーさんもその時点ではまだ中国へは入れない時期で、文革の中国で何が起っているかどうもよくわからないという感じだったのが印象的でした。

なおかなり印象的になりますが、その時点での東洋文庫の近代中国研究委員会はその後の慶応の中国学と雰囲氣的に何となく近かったとってよいかも知れませんね。

村田雄二郎：

先生は1966、67年あたりから本格的な毛沢東論を発表されたと思います。例えば、67年に竹内好さんと共編で、『講座 中国 I 革命と伝統』（筑摩書房）を刊行されています。ちょうど文革の開始と同じ時期ですが、このあたりのお話をうかがえますか？

野村浩一：

65年にアメリカのベトナム北爆が行われるとともに、66年春頃から文革が始まり、夏には紅衛兵運動、67年1月には上海を皮切りに各地で奪権闘争、8月には武漢事件と、中国がひっくり返るような騒ぎになりました。日本中で「中国に何が起きているのか？」ということがとても大きな問題となり、筑摩書房から話があって、竹内さんを中心に京都の研究者の方々とも協力して講座をつくることとなりました。メンバーには堀田善衛さんなどもいらっしゃいました。5巻本でした。記憶に誤りがなければ、最初の打ち合わせ的なものがあつた時、加藤周一さんや武田泰淳さん(?)などもいらっしゃったように思います。でもこの講座はあまり定着しなかったのではないかと思います。私個人も67年の段階では本当によくわからなかった。「何故、文革が起つたのか?」。全くわからなくて、本当に困りました。それまで10年ほど中国を勉強したのに、何故文革が起つたのか全くわからない。この夏は大変苦しかったですね。結局、私はわからないなりに、その時は「ロシア革命と中国革命」というかたちで対比する他なかった。ふり返ってみると、竹内さん

も他のみなさんもやはり捉えきれてはいなかったと思います。竹内さん自身非常に慎重で、何とか中国の歴史と風土の中にとりあえず置いてみようという姿勢だったと思います。歴史がまだ正体を現していなかったですね。

72年の日中国交回復までは非常に情報不足でした。そうすると、オーソドックスにいえば、中国が公表する言説、つまり先ずは「思想」を回路として考察する他はない。その当時、香港からのいわゆるチャイナ・ウォッチングという方法はないわけではなかった。しかし、研究者としていえば、もっぱら情報に頼って考察するわけにはいかない。そうした中で、その翌年、「毛沢東思想の形成と特質——とくに大衆路線の思想について」(『思想』1968年3月号)という論文を書き、幹部と大衆という形で、いわゆる大衆路線の問題、毛沢東の運動のあり方のある一点をつかまえようとしてしました。実はその時、私は毛沢東の思想あるいは文革の一側面を思想内在的に理解し得たように思いました。大衆路線という問題は、政治学的にいうと、たしかに党が大衆を動員し、操作するという側面をはっきりともっているのです、その後の研究でも明らかにされているとおり、実体として価値的に評価することはできません。しかし、中国革命の思想としての理解は正しいのではないかと今でも思っています。しかし、そのあと、党の問題の分析についてはやはり明らかに認識を誤ったと考えています。その翌年に書いた「現代中国における党と思想——『文化大革命』に関連して」(『世界』1969年10月号、12月号、1970年4月号)で党を「核心党」と規定して、そこに特質を見出そうとしたのはまちがいでした。それは中共九全大会(1969年)に影響されすぎていました。

それから少し前に戻りますけれども、文革前、64年の中国の核実験はやはりショックでしたね。その頃、竹内さんの発案でごく少数で満州国問題研究会を開いていて平野健一郎さんとも一緒だったのですが、その会で竹内さんから意見を求められ議論したことを覚えています。ただこの会は私たちの力不足で、しばらくして解散しました。

村田雄二郎：

70年代の先生のお仕事で、大陸問題や近代日本のアジア主義などに関するたくさんの著述、例えば橘樸、尾崎秀実などに関するご研究がありますが、それらは「満洲問題研究会」の延長でなされたものですか？

野村浩一：

それは、全く別なのです。

村田雄二郎：

ではそれらの問題と毛沢東や文革についての御研究は先生のなかで、どのような位置、つながりがありましたか？

野村浩一：

70年代の前半になると、文革中国も政治的にも思想的にも大変混迷してきて、中国の現状分析をするというつもりがあまりなくなりました。むしろ政治学的に見て、これは結局どのように收拾するかだけだと思わざるを得ませんでした。ただ、先ほど申し上げました通り、竹内さんから日中関係史は日本側と中国側と「平行してやるべきだ」というアドバイスがあり、たしかにそうだと思っていたので、頼まれた場合も比較的積極的にやりました。その背後には、自分の現代中国研究において、最も広い意味で、戦前の、あるいは日本近代の中国研究、先人の研究から学びたいという気持ちがあったといえるかも知れません。橋樑については当時の中国と日本の接点に身を置いて、ぎりぎりのところで研究をつづけていた人物のように思えて、これは自分から取り上げて考察しました。

村田雄二郎：

71年に『中国革命の思想』(岩波書店)が出版されました。今日読み返しても、特に中国マルクス主義の歴史的な形成過程を追ったところは、十分価値のある先駆的な研究だと私は受けとめています。文革の時期にこれだけのものが出たというのは、世界に誇れる研究成果だと思いますが、御自身のなかで、または日本の研究界のなかで、いつ頃どのようなかたちで文革への見方が変化したのでしょうか？

野村浩一：

やはり林彪事件でしたね。私は71年に初めて訪中したのですが、この年に林彪事件が起っていました(発表は72年)。その前、九全大会(1969年)の党規約の中で林彪を後継者にすると書き入れた時、実は非常に理解に苦しみ、そうした政治のあり方は到底是認できなかったですね。私は文革の時も、中国を内在的に知るためにはどうすればいいのか、そしてその内在的な部分を思想的に取り出したいと思っていたのです。しかし、林彪事件

以降は、その当時でも全てが政治がらみとなり、一応の情報に接すればある程度、政治の筋道がわかるようになりました。だから、林彪事件以降についてあまり思想的に分析する興味がなくなりました。

村田雄二郎：

中国が国際社会に復帰するのも林彪事件の時期と重なっていますが、この時期、先生御自身が中国を見る見方はいかがでしたか？ひょっとしたら新しい時代が始まるという受けとめ方はありましたか？

野村浩一：

やはり 72 年のニクソン訪中、日中国交回復は非常に決定的でしたね。しかし、私の場合、それは国際関係とか中国自身の変化の分析とかいうよりも、むしろ日本人自身の問題としての受けとめが優越していました。一言で、国交が回復して「暗雲が晴れた」という想いでした。それまでは法的には中国大陸とはなお「戦争状態」といってもよかったわけですから。実は、50 年代後半から欧米を研究している研究者はどんどん現地へ行けるようになってきているのに、中国研究者は行けなくて悔しいという想いもありましたからね（笑）。少し大げさな表現ですけれども、これは侵略戦争という歴史を背負っている日本の中国研究者の「原罪」(!)だと多少真面目に思っていました。それで、私は大学で留学のチャンスがあるようなら先ずアメリカに留学しようと思っていましたが、ベトナム戦争を戦うアメリカには行きたくないという気持ちになって、イギリスに行こうと思い、少しその準備をしていたのですが、その直前に突発的に自然気胸という病気に罹って、イギリス行きもやめになってしまいました。

村田雄二郎：

72 年の国交回復以降、中国とのお付き合いはどのようなものでしたか？

野村浩一：

国交回復以後もすぐ交流が日常的に行われるようになったわけではなく、78 年の日中平和友好条約締結が一つの節目だったでしょうか。その頃、訪中旅行の機会があって、その際、学術交流で留学したいと申し出たことがありましたが、向こうの人がわざわざ北京飯

店に来て、宿舎など設備がとても整わないからと断られたことがあります。徐々に交流が進んだものの、何となく散発的で向う側の事情もよく分らず、やはり **80** 年代になってからではないでしょうか。

村田雄二郎：

85 年に上海に一年間長期滞在された時の御経験はどのようなものだったのでしょうか？

野村浩一：

70 年代の訪中は「街の中が見えない」という状態でしたね。**71** 年、最初に訪中した時は、自分が勉強してきたのは、こういう所だったのかと感無量というか、茫然自失というか。その時は周恩来総理とも会いました。その後、留学としては先に **81** 年にハーバード大学に留学し、ヴォーゲルさん、シュウオーツさん、キューンさんなどにお世話になりました。そして、**85** 年にはやはり中国のシビルライフをぜひ知りたいと思って上海に行きました。しかしまだ人々の中に自由に入れるような感じではありませんでしたね。

村田雄二郎：

その当時の中国は胡耀邦時代でしたね。政治的に日中関係はきわめて良好でした。その頃から、改革開放のアクセルがふまれたわけですが、「竹のカーテン」が開かれた **80** 年代以降の中国、もしくは中国の人々との付き合いを通じて、**50** 年代から **70** 年代までの先生の御研究に対して、新しく思うところはございましたか？

野村浩一：

村田さんもその頃留学されてたんですね？

村田雄二郎：

82 年の夏から **84** 年の夏まで **2** 年間、北京に留学していました。先生とほぼ同じで、靖国問題や歴史認識問題が起こり始める時期です。

野村浩一：

まだ社会の締りが相当かたかった（笑）。

村田雄二郎：

毛時代の社会主義メカニズムが機能していましたよね。

野村浩一：

商店に行けばやはり「没有」の時代でした（笑）。とても開放体制とは思えなかったですね。外貨券時代だったしね。物資も不足していました。ただ、この時、世界史的な視野でこの時期の中国をどのように捉えるかということは考えざるを得ませんでした。改革開放という「離陸」に際して、あまりに「大きい」そして「重い」中国が、ジェット機にたとえれば、滑走路からはたして飛び上がれるのだろうか。あるいはまた滑走途上でバラバラにこわれる恐れはないだろうか。

村田雄二郎：

わかります。20代で中国に留学した私は、まず社会主義システムのなかでの物不足や不便さを味わいました。そしてもうひとつは、昭和30年代日本の高度経済成長期のように、「窓が開いてこれからだ」という社会全体の楽観ムードを体験しました。胡耀邦の84〜86年はそういう時代でしたね。そして、趙紫陽の時代になるとインフレがあり、経済引き締めの問題が出てきまして、もう一度、党による「力の支配」があらわれることとなりました。「六・四」（天安門事件）についてはどのように見ておられますか？

野村浩一：

その頃、中国については二つの枠組みで考えなくてはいけないと思っていました。一つは戦後史の中で、たとえば日本が廃墟の中から経済復興、経済成長をする。中国が改革開放、市場経済の時代へ入ろうとして、そういう20世紀後半という歴史的背景の中で中国の現在を位置づけてみる。当時、中国でもそういう関心が強く、日本のエコノミストも中国にいろいろ招かれて、戦後の日本の経済発展について様々に話していた筈です。しかし他方、もう一つは、19世紀の日本の開国から近代化の過程という歴史的枠組みですね。御承知のように、当時、中国の留学生の中では、日中の近代化の比較というテーマが圧倒的に多かったのではなかったでしょうか。この短期的な枠組みと長期的な枠組みという、い

わば二つの眼鏡で見て、焦点を合わさなければと思っていました。しかしそうだと、どのようなことがいえるかについては、やはりとても十分な予想はできなかったですね。ところで、私は「六・四」の一年前の 88 年に政治学関係で福田歓一さん（東大）たちと訪中し、厳家其さんや逢先知さんと会って討論しました。その時、政治改革が日程にあがっているという雰囲気と、しかし何となく非常な厳しさを強く感じました。しかし、「六・四」は私にとってもむろん予想外でした。この時は、様々の情報、映像が飛びかい、事態は刻々と伝えられましたけれども、やはり事態は完全にジャーナリズムの領域で進行し、ひたすら見守るばかりでした。ただし最も広い意味での民主化の問題をめぐって、事柄の本筋は単純だったと思います。研究の面で言うと、ちょうど少し前から始まっていた『岩波講座・現代中国』の研究会とそしてその刊行の時期と「六・四」がほぼ重なったんです。そこで急遽、別巻 2 巻を加えて。全体としてよく売れて読まれたようですね。

なお 80 年代から 90 年代にかけての交流ということについていうと、専攻の思想史の関係から上海の湯志鈞先生を立教大学に一ヶ月ほどお呼びし、また北京では李沢厚先生、丁守和先生などともお付き合いの機会がありました。徐々に個人的な交流が進んだといえるでしょうか。

村田雄二郎：

『岩波講座・現代中国』（別巻 1 「民主化運動と中国社会主義」）に先生が書かれた「中国の権力と伝統」は、「六・四」の衝撃のもと、中国の権力構造を歴史的なタイムスパンで省察したものです。それが、その後の辛亥革命や五四運動の再考につながっていくと私は理解していますが、いかがですか？

野村浩一：

「六・四」の実態的な分析を離れて言えば、その通りです。むしろ私は文革の過程を通じて、それまで中国革命は中国の大地をかなり深く掘ったと思っていたのが、私が考えていた以上に実は掘り方が浅かったと感じました。文革のプロセスで私が一番ショックだったのは、出身血統主義ですね。こうした主張が文革の中から飛び出してくるとは夢にも思わなかった。じっさい信じられない程です。もうひとつは暴力の噴出あるいはアナーキー性です。別の形でいうと、文革は一方では、ともあれ、ある種の強烈な理念的アピールを発して登場しました。つまりそこでは文革のもった理念性と暴力性が非常にあらわになっ

たわけですね。そしてこの両者が背中合わせになっている。それを結びつけているのが毛沢東権力ですね。この2点を考えることが、中国革命、そして文革を経た中国を考える場合でも重要な問題だと思いました。この後、つきつめていくとこれは「権力あるいは権力のあり方の問題」だと考えるようになりました。具体的には皇帝権力あるいは皇権モデルです。私の感覚では、中国では人々は上から下まで様々なレベルがあるけれども、およそ当権者一実権者はそこでは全権をもっている。何でもできると思っっているのではないかと。「権力をもっているうちに使わなければ、期限が過ぎるとダメになってしまう」(権力不用、過期作廢)という言い方があると聞いたことがあります。つまり持っている間は思い切り使わなければならないということになるのでしょうか。そして、そうした権力を生み出した歴史、政治風土、政治文化を考えていきたいと思うようになりました。新文化運動—『新青年』の研究(『近代中国の思想世界』岩波書店、1990年)、辛亥革命の政治文化の分析などは、やはり大きくはその延長線上にあるとっていいと思います。

村田雄二郎：

日本人も含めて外国人が中国を研究する際、中国を特有の権力構造、あるいは個性的な政治文化をもつ国と見るか、政治学などのディシプリンを使って横の比較やひろがりを見るか、中国研究はずっとこの両極問題をかかえてきたように思われます。漢学や支那学を含めて、地域研究者は中国の固有性や特殊性の解明をある種の目標としてきましたが、グローバル化のこの時代に、中国研究そのものの意味づけという古くて新しい問題に、われわれは改めて直面しているのではないのでしょうか。外からは見えにくい中国政治のある部分を、一方では普遍的な枠組みで考察しつつ、他方では共感的・内在的に理解するという両方の視点が必要だと私は考えています。こうした問題に対するお考えをお聞かせいただけますか？ とくに南巡講話(1992年)以降の中国政治の展開をどのように見ておられますか？

野村浩一：

直接のお答えにはなりにくいのですが、94年に書いた「辛亥革命の政治文化——民権・立憲・皇権」(上)(中)(下)『思想』1994年7月、9月、10月号)では、この時期をとらえて、中国に内在する様々な思想や文化のあり方とその動態、さらには近代とは何かという大きな問題を考えてみたいと思いました。やはり中国の歴史という縦軸と世界史、

ウォーラーシュテインふうにいえば世界システムという横軸の両方でないと中国の 19 世紀末から 20 世紀は捉えられないと感じて、政治思想史として扱ってみた次第です。

それから 95 年の『蒋介石と毛沢東』（岩波書店）で蒋介石政権を考えてみて、大変興味深かったです。これで、清末から民国というそれぞれの時代を私なりに多少ともつなげて見ることができたように感じました。私は蒋介石の権力をクライアンティリズム（恩顧主義）的権力と規定しましたが、蒋介石の権力は中国の伝統的権力構造にやはりつかっていて、急速に家父長的権力にずれこんでいくように感じました。もし日本の侵略がなかったら、蒋介石が毛沢東に負けなかったかも知れないという説に私は否定的ですね。10 年代、20 年代の中国の政治、社会構造を基本的に変革していくということは、やはり難しかったのではないかと。もっとも、日本の侵略ということ自体が東アジアの近代史の本質的部分でもあるので、仮定の話はあまりよくありませんけれども。

先日書いた「近代中国における『自由主義』の位相と運命——30 年代・『独立評論』へと至る胡適を中心に」(上)(中)(下)（『思想』2006 年 7 月、9 月、10 月号）では胡適を扱いましたが、胡適が主張するリベラリズムが根付くかということ、やはり疑問に思います。ただし、権力に対してはつねに批判が必要という胡適の思想は一貫していて、これは今後も不可欠の命題であり、歴史的意義があると思います。ただ、中国が長い歴史のなかでもっていた固有の核心的な思想的要素は、外来のものと葛藤していくなかで変容するにせよ、やはりそこにしか固有の活力のようなものは見出せないのはたしかではないかと思えます。胡適の場合を含めて過去との対話を通じて、リベラリズム的要素もまた今後の中国に内在化していくのではないかと考えています。

ここで先程の御質問に戻って、両面からの考察が必要ではないかという村田さんの御意見に私は賛成です。そしてこのことはとりわけ近代以降の中国を扱うに当って絶対的に必要です。歴史哲学的にいえば、そもそも「近代」についての定義という大問題に突き当たりますが、私はいわば横軸の問題を考えない限り、19 世紀以降の中国はととも捉えられないと思っています。それから南巡講話以降の中国については改革・開放という市場経済へふみ出した中国が、90 年代末以後、あっという間にグローバル化の波にのみこまれたようにみえます。この大波は日本もまたほとんど予期し得なかった進展ではないでしょうか。中国は何とかこの波を自分の中に吸収していくかも知れないし、あるいは現在も大変な綱渡りをしているかも知れない。

村田雄二郎：

政治の自由化・民主化は、いまだに中国でもっとも変化の少ない部分です。基層レベルでの選挙が民主化の第一歩となるという意見もありますが、民主主義が中国で内在化するきっかけはなかなか見えていないように思います。他方で、近年では権力の腐敗が深刻化しています。このことを先生のご研究と絡めて考えると、どうなるでしょうか？

野村浩一：

先ずは権力の透明化、公開原則が少しずつでも押し進められることしかないと思います。30年代の胡適は都市——青島市では選挙ができると言っていますが、どの時代でも人々が意識的に前進させることは可能なのではないのでしょうか。批判原理の重要性は市民社会論と結びついてきます。このような面からのアプローチは現状分析でも大切だと思います。現在ではNGO、NPOを含めて「市民政治論」的な課題として展開することが必要ではないのでしょうか。

村田雄二郎：

先生が今後の中国研究に望むものは何でしょうか？また、日中関係もしくは日本にとっての中国という問題で、何か後進におっしゃりたいことはございますか？

野村浩一：

そういう大問題にはとても容易に答えられないのですけれども、ほんの少しだけ感想を言いますと、近現代中国研究は90年代末以降、以前とは全く比べものにならない程、研究環境が変わっています。それは先ず一言で、資料の開示、史料の発掘、そしてそれらの共有による研究の進化、進展です。その意味では、歴史学固有の分野では、中国の研究者あるいは欧米その他を含め、広く世界の研究者と並んで同じ土俵のうえで仕事を進めていかねばなりません。つまり広義のシノロジー、中国学の中で仕事を進めていかねばならず、そのため実力が必要ということです。それは「学」の普遍性といえるかも知れません。しかし他方、私たちにとって、中国研究は究極のところ、外国研究です。私たちは私たちの立場、目でもって中国のことを研究し、中国の事物を評価することが必要でしょう。じっさい、もし研究において資料面だけからいえば、結局のところ中国の研究者にかなわないということは一杯あるでしょうし、これは当然のことです。まさにそれゆえに、私た

ちはどれほど日本人としての拘束性を受けているにせよ、その立場から研究を進め、日本にとって、同時にまた中国にとって意味をもつ研究を提示していかねばならないと思います。ただ、こんなふうと言うのは、やはり大言壮語のたぐいで、じっさいは地道な仕事を少しずつ積み重ねていく他はないことはわかっているのですけれども、あえて言えばということです。

それからどうしても付け加えておかなければならないのですけれども、今日の話の中では台湾についての問題が大きい問題として残っています。私は台湾に行っていないんです。それは 70 年代まではある程度、政治的な問題がありましたけれども、意識的にそうだったというのではなくて、何度かお誘いを受けたものの、何となく機会を失して、時間が完全にフリーになってからは、体が動かなくて(笑)。戦後台湾については、私はかなり早い段階から戴国輝さんとの関係が大きいですね。彼は若い頃、中国革命派で、台湾の「解放」で中国革命は完成するという立場だったと思います。だから、当時の国民党との関係はきわめて緊張かつ微妙だったと思います。また、その頃、王育徳さんの書物からは台湾独立派の主張を知りました。

村田雄二郎：

80 年代末以降、台湾研究の新しい流れが台湾でも起っています。以前、竹内好さんが中国研究者は台湾研究を視界の外に追いやっていると批判されていましたが、今のお話を伺っていると、日本の中国近現代研究が必ずしも台湾を疎外していたというのではなく、それは時代の影響でやむを得なかったと考えたほうがよろしいでしょうか？ 60、70 年代、中国研究にとっての台湾の存在感はいかがでしたか？

野村浩一：

僕自身は「新中国」の解明という地点から出発していたので、台湾はやはり中国の一部としてしか考えていませんでした。その点では研究の前半では戴さんの影響は大きかった。それと、蒋介石が総統として支配していた時期はどうしても国・共という政治図式が台湾問題を蔽っていたといえるでしょう。ただ戴さんもむろんその後、ずっと問題を深められ、台湾に戻って色々活躍されたことは御承知のとおりです。他方、尾崎秀樹さん——ゾルゲ事件で刑死した尾崎秀実さんの弟さんですが、彼は戦争中、学生時代を台湾で過ごして、その経験から、日本の植民地文学のなかでの台湾を扱ってすぐれた業績をあげられ、竹内

さん同様、台湾を見ずして中国はわからないという認識でした。私は「中国の会」などを通じて、かなり早い時期から彼から色々教わり、最初の訪中も一緒でした。ただやはり 70 年代までは、中国研究、台湾研究については政治が大きく影を落としていたことはたしかだと思います。

村田雄二郎：

最後に、方法論的に中国近現代研究に望むことはございますか？

野村浩一：

中国近現代をどう捉えるかは常に大きい課題です。やはり普遍主義的に考えていきたいと思っています。中国自身も世界史の流れの中で、それらに敏感に反応しつつ展開していくと思います。私の感想からいうと、先にも触れましたように 80 年代以降の「改革、開放」は 90 年代末から 21 世紀に入ると、実はあっという間にグローバリゼーションの波にのみこまれ——これはすべての国にとってそうなのですが——「近代・現代」の両方の課題の中で前途を求めてもがいているように思います。この場合、どこの国でも固有のものがあり、それが変容しつつ、その時代、その時代をつくっていくと思うので、やはり縦軸と横軸、その接点、あるいは接面という他はないでしょう。中国に何か「もうひとつの近代」があるというふうには思いません。価値における普遍性はだんだん共有されるけれども、行動や態度については伝統的なものが依然刻印されつつ展開するということではないでしょうか。ともあれ、中国の近現代をそうした視座のもとに捉えていくことが必要だと考えています。

村田雄二郎：

今日は本当にいろいろなお話をしていただきまして、ありがとうございました。